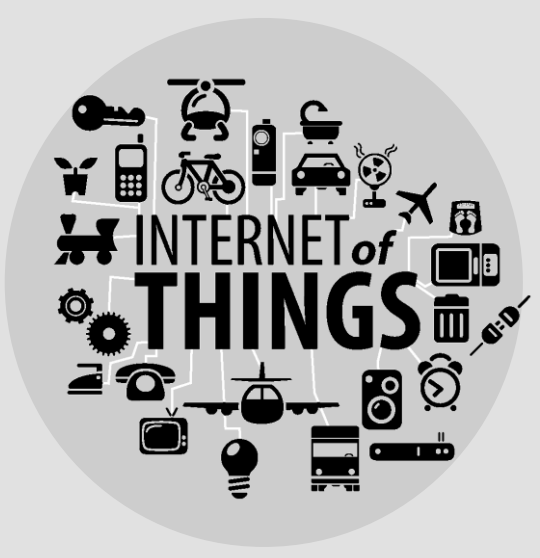
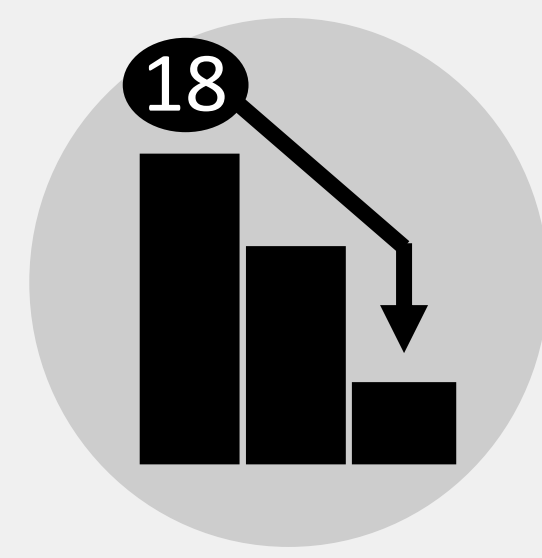


短大を取り巻く環境



第4次産業革命
Society 5.0



18歳人口の減少
H27:120万
→H45:100万人



首都圏定員抑制
地域振興



学び直し
生涯学習

短大の特徴



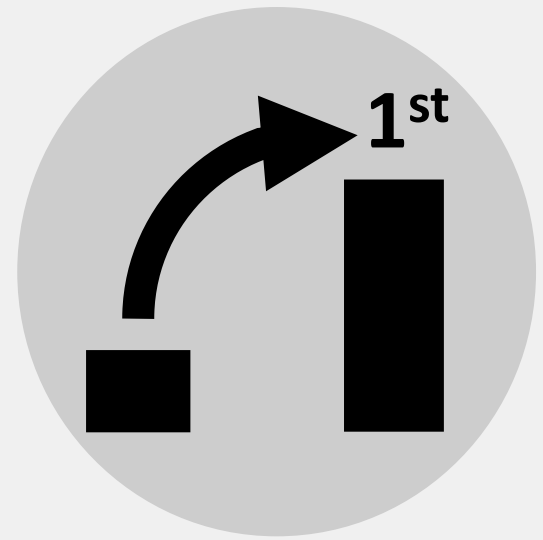
アクセス
女性・地域・社会人



ニーズ
幼保・看護・介護・栄養



地域貢献
高い地元就職率



ファーストステージ
編入学・専攻科の強化



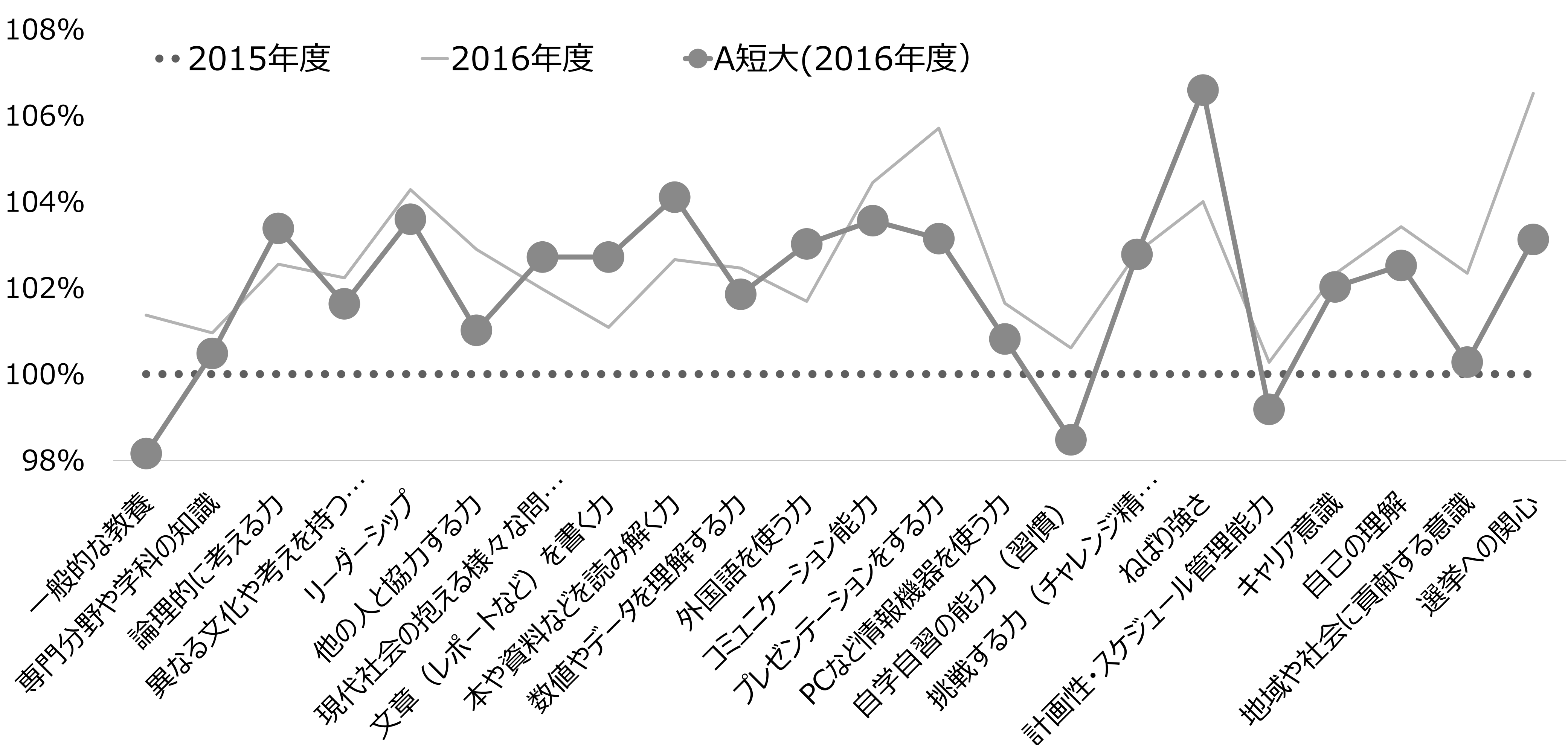
分析対象

調査実施母体：短期大学基準協会
 調査名称：短大生調査（Tandaiseichosa）
 使用年度：2015年度及び2016年度の結果
 2015年度：総参加校59校、総参加人数18,532人
 2016年度：総参加校57校、総参加人数17,703人

対象：2015年・2016年共に
 参加した短期大学35校
 学生数：5,822名（2015）
 5,537名（2016）

対象の範囲：

2015年度	2016年度
1年生	2年生
1年生	2年生

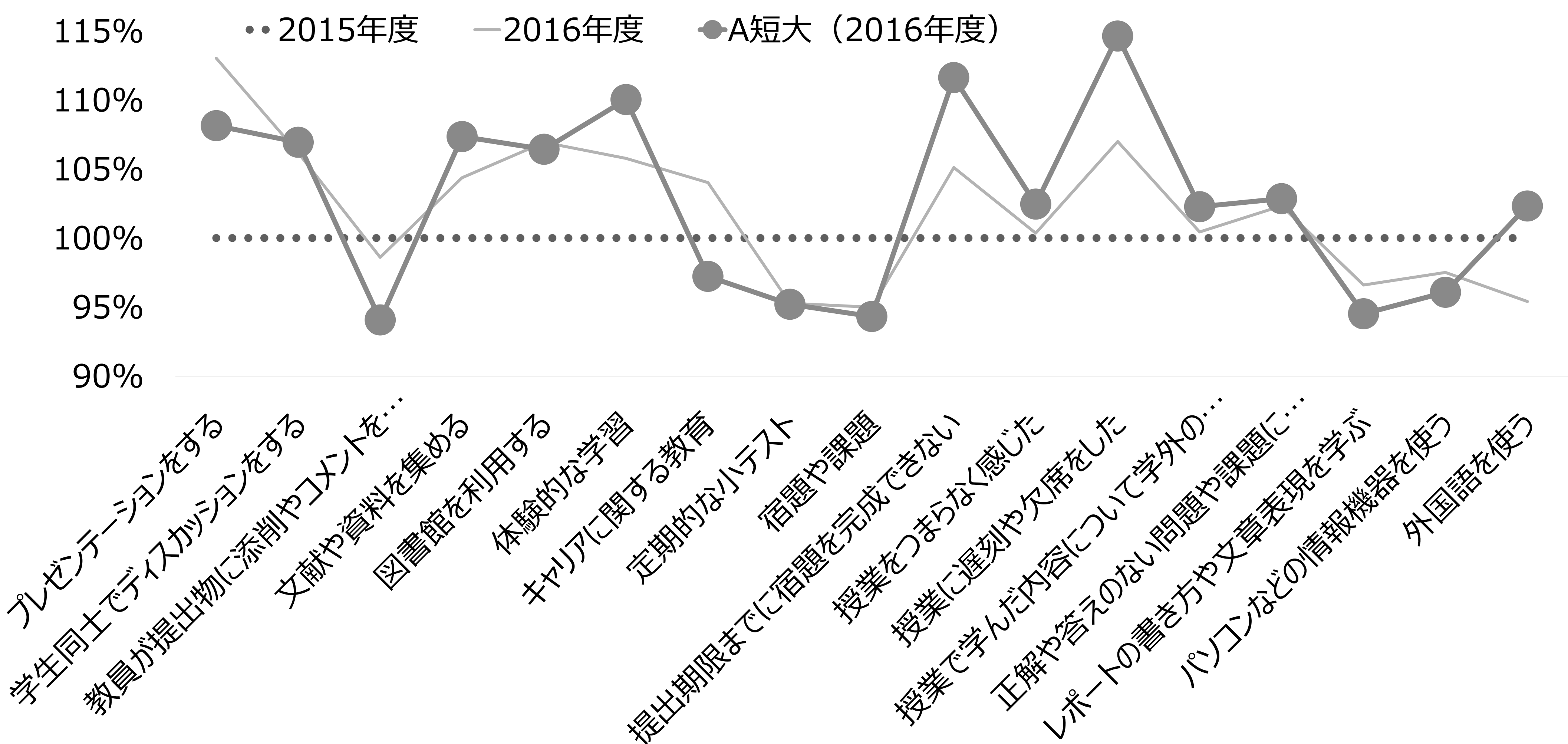


◎ 学修成果の2か年分のベンチマーク
 (2015年度結果（全体とA短大）を100%として上昇率比較)

- ✓ 2015-2016年度（全体）をみると、2年生のときの方が評価が上がる傾向がある（学年効果）
- ✓ A短大の2か年比較をみると、「一般的な教養」「自学自習」「計画性」などが2年生の方が評価が低くなっている
- ✓ 全体とA短大を比較すると、A短大の短大生は汎用的技能は伸びを感じる一方で、コミュニケーション能力はやや伸びを感じていない傾向にある

◎ 学修経験の2か年分のベンチマーク (2015年度結果（全体とA短大）を100%として上昇率比較)

- ☆ 2015-2016年度（全体）をみると、2年生の時の方がプレゼンテーションやディスカッションといったアクティブ・ラーニングや文献収集、図書館利用などの学修行動が増加している
- ☆ 全体と同様に、A短大もアクティブ・ラーニングといった学修は多くなっているが、授業に対して退屈を感じ、遅刻・欠席が多くなっている
- ☆ 全体とA短大を比較すると、A短大の短大生の教員からのフィードバックは、全体結果よりも減少率が高く、授業を敬遠する割合も多くなっている。



- ・2か年の同一の学生集団の結果の比較を通して、全体の傾向と個別短大の傾向を見ることに一定の効果ある
 → 同一集団の変化を追うことで教育改善につなげる
- ・在学生の2か年の変化では、成果をとらえられない可能性もある
 → 就職後の動向や在学時の教育成果の実感なども含め、評価改善につなげる必要性

◎ 在学時と卒業後を一体として、短大教育の質をどう保証するか

